

新任の先生方

〈新任教員紹介（50音順）〉

1. お名前；2. ご担当科目（初年度の）；3. 最終学歴および略歴；4. 学生に一言

1. **家 城 清 美**（いえき きよみ）

2. 学習指導と学校図書館

3. 1977年同志社大学文学部社会学科社会福祉学専攻卒業。1977年同志社女子中学高等学校（司書）、2001年同志社女子中学高等学校（司書教諭）。2000～2003年 京都教育大学非常勤講師、2005年 京都ノートルダム女子大学非常勤講師、2003～2008年 放送大学分担講師。2007～2008年 京都府私立学校図書館協議会会長。2007年「図書館で調べる学習コンクール」指導者部門優秀賞受賞。主たる著書に、『改訂版 学校経営と学校図書館』、『子どもの読書活動をどうすすめるか』、『インフォメーション・パワー 学習のためのパートナーシップの構築—計画立案ガイド—』翻訳、『北欧の学校図書館』（同志社大学図書館学年報 第33号）、『学校図書館職員の現状と課題—近畿地区学校図書館実態調査を養成の立場から分析する—』（図書館界 第53巻2号）、「自分の中にフィルターをつくる—情報活用能力を育む授業—」（『同志社時報』No.126）、「学校図書館メディアの構成」図書館情報学担当大学教員全国研究会口頭発表 [ほか]

4. 今年から「学習指導と学校図書館」を担当することになりました。よろしくお願ひします。学校図書館を活用することで教師は授業の流れや教授法をどのように豊かなものにできるか。また生徒はどのように深く幅広く学べるか。その可能性を体験できるような授業をしたいと思っています。まず、授業を楽しみそしてその楽しさを生徒に伝え、分かち合えるような授業展開を試みたいと思います。

1. 和中幹雄 (わなか みきお)

2. 情報組織論、図書館経営論

3. 東京外国語大学ロシア語科卒。1973年から2009年3月まで36年間国立国会図書館に在職。入館後1997年3月までの24年間は資料整理部門に在籍し、全国書誌作成システムや典拠作成システムの整備を手掛ける。1997年4月以降の残りの12年間は、国際子ども図書館の設立準備、関西館開館に向けた新たな情報システム構築、東京本館リニューアル開館準備など、さまざまな新規プロジェクトの最前線で過ごす。最後の2年間は、デジタルアーカイブ事業や図書館協力事業を担当する関西館長を務める。

また1986年から2003年までの17年間、日本図書館協会目録委員会委員を務め、資料組織法の研究に従事。1985年から1993年まで、立教大学の非常勤講師として、図書館演習、資料分類法講義を担当する。

4. 21世紀に入ってから、図書館にかかわる世界は大きく様変わりしつつある。指定管理者制度の導入などによる図書館経営のあり方の変化、資料のデジタル化に伴う資料情報流通のあり方の大きな変化、課題解決型図書館の展開による利用者像の変化など、静的な性格の色濃かった文化教育機関としての図書館が、社会の最前線に登場することとなり、動的な性格を帯びつつある。その結果、じっとしていれば、図書館はこの社会から消え失せてしまうかもしれないし、逆に社会の知的活動の基盤として、地域社会あるいは学術研究のコミュニティにおいてなくてはならない存在に「おおばけ」するかも知れないといった状況を迎えている。このようなワクワクするような状況で、これからの司書が求められる資質も変わりつつある。図書館が「おおばけ」するためには、情報編集能力や情報活用能力の高さに加え、さまざまなネットワークにおいて形成される「集合知」を利用してサービスを提供するといった開放性や柔軟性、さまざまな社会的活動を企画する能力あるいは情報発信能力などを持つ司書の存在が必須である。このような資質を持つ司書となることを目指す努力をしてほしい。

また、日本の図書館情報学も21世紀に入ってから、西欧の動向の翻訳紹介だけの段階から脱皮して、独自の方法論に基づく独自の研究を行い得る段階に達しつつあるように思われる。図書館情報学は社会学的調査や経営

学的分析、歴史学的なアプローチ、情報工学的アプローチから言語学や記号論的な研究など、きわめて学際的な学問である。そのため、それ自体の学問的根拠が問われることにもなるが、逆に、別に専門分野を持ちながら、それと図書館情報学を結びつけることが可能な学問であり、そのような意識で取り組むことも必要であろう。

司書課程の科目は司書資格を取るための科目であり、そのための知識や技術の習得は最低限必要ではあるが、表層的な知識や技術を身につけるだけでなく、各事象があるのは何故かという、WHYという問いを常にいただき、図書館に関わる事象をできるだけ原理的に把握することを心がけてほしいと思う。